



「正義は力の等しい者の間でこそ裁きができるのであって、強者は自らの力を行使し、弱者はそれに譲る、それが人の世の習いというものだ」

民主主義国家の原型とされる古代アテネの使節が、紀元前5世紀のペロポネソス戦争で、小国メロスに服従を求めた発言である(トウキョウデイズ、城江良和訳『歴史』2)。



山内 昌之

富士通FSC特別顧問

トランプ史観

メロスの代表は答えた。「窮地に立たされた者には、道理と正義の存在を認めてやること、そして、たとえ正確さに欠けていても、わずかでも納得できる論理を述べた者には、利得が与えられることである。それは吾々以上に、諸君にとって大きな利益となるであろう」(同)

ホワイトハウスでのトランプ米大統領とウクライナのゼレンスキー大統領の口論に通じるものがある。トランプ氏とアテネの使者に力を賢く使い、恵まれ

るほかなく、弱者が器量不相応に領土主権にこだわって紛争が起こる、と言いたかったのだろう。メロスの代表が諄々と説いたのは、共通の価値観を持つ者同士は、強者が弱者に力を賢く使い、恵まれ

「力は正義」振りかざす

節に共通するのは、力は正義なりという強者の信念である。民主主義は、自由競争を是とする限り、力こそ唯一の政治的現実と信じる流れを生み出す。トランプ氏もアテネの使節も、弱い国は強い国に交渉で譲歩す

診したとも、アルバニアやインドネシアの可能性を模索したとも言われる。だが、パレスチナ人の自決権とアラブの名譽を傷つけるガザの保養地構想は、アラブの盟主サウジアラビアに、米国の主導するイス

ラエルとの対イラン枢軸形成をためらわせた。それにしても、カナダを米国51番目の州にし、かつて租借地だったパナマ運河の奪還やグリーンランド領有をもくろむのは、19世紀めいた領土帝国主義の復活を思わせる。ただ、「米国を再び偉大に」を実現する手法は、不動産取引にも似て意外と平和的なものだ。

1803年にフランスから1500万円で買った大

ルイジアナや、67年にロシアから720万円で購入した

アララスカなど、米国はしばしば条約で領地を買収し

て国土を拡大してきた。

〈2面に続く〉



1面の続き

山内昌之氏 1947年生
まれ。カイト大学客員助教授、
ハーバード大学客員研究員、
東大中東地域研究センター長
などを経て、東大名譽教授、
ムハンマド5世大学特別客員
教授、武蔵野大学客員教授。

過去の買収による米国領
土拡張の延長としてトラン
プ氏のグリーンランド領有
やガザ所有の発想があると
したら、不動産王の思考に
すぎないと嘲笑するだけで
はすまされない。
アテネの政治家アルキビ

アデスによる「世のしきた
りの軽視と逸脱」は、「専
制君主に通ずる異常」であ
ると警戒された。
民主派のペリクレスや哲
学者ソクラテスに愛された
ギリシャ民主政の寵児ア
ルキビアデスは、平気で敵
のスパルタやペルシャ帝国
と交誼を結んだ。トランプ
氏もウクライナやパレスチ
ナの生存権を無視し、プー

ではいかと思わせる。彼
が2020年に語った指針
では、自由や公正といった
共通価値観は強調されず、
「我々はグローバルイズムを
退け、愛国心を受け入れた
と述べただけだった。
米国が、ロシアの北極圏
支配を牽制できるグリーン
ランド、中国（香港）企業
が出入り口を押さえるパナ

ア出兵の前後、カルタゴ(チ
ユニア)からリビアを押
さえることを夢見た。出兵
の余勢を駆って、イタリヤ
とペロポネソス(スパルタ)
を包囲するスケールの大き
な地中海戦略を描いた。
その政治手法を「何でも
ござれのならず者風」と呼
んだのは、歴史家トゥキキ
デイスだ。この指摘は、
どこかトランプ氏へのもの
マ運河、そしてイランの軍
事援助を受けたガザをデ
ィールで購入しても、再編さ
れる新国際秩序の性格がど
うなるかの答えはない。共
通価値観や普遍的規範なき
ニヒリズムが變遷として浮
かんでくるだけだ。
トランプ氏は正統的な保
守主義者とは言えない。口
で中国に大幅な追加関税を

無慈悲促すニヒリズム

課す決断は、大胆な破壊や
革命につながる政治手法と
言っただけ。21年1月に米
議会議事堂をためらいなく
襲ったのはトランプ支持者
である。トランプ氏の政治
手法は、民主主義になじま
ない破壊や革命の装いを帯
びているのは確かだ。
トランプ氏の過剰なイス
ラエル関与を考えると、彼
関や多国間協定の否定はト
ランプ氏の真骨頂だ。国連
人権理事会から離脱し、国
連パレスチナ難民救済事業
機関(UNRWA)をテロ
リストの巣窟と決めつけ資
金拠出の停止を続ける。
力に正義というトランプ
氏のニヒリズムは、ネタニ
ヤフ氏やプーチン氏の強権
に一層の自信を与えた。ガ
ザで5万人以上の死者を出
し、ウクライナでも無数の
都市住民や農民が犠牲とな
って引き出された結論は、
無差別かつ無慈悲な戦術こ
そ有効だということだ。ニ
ヒリズムそのものである。
人質救出よりハマス殲滅
を優先するネタニヤフ氏の
自己保身は、人質の犠牲を
重ねながらイスラエル社会
の分断を強めている。
分断はガザ社会でも進行
している。一般市民の生命
や生活を無視して武装闘争
を続けるハマスの抗議する

を孤立主義者とはみなせな
い。ロシアのプーチン氏へ
の信頼感を見ると、反共主
義者や、民主主義拡大を掲
げる新保守主義者(ネオコ
ン)とも言えない。
トランプ氏を「主権主義
者」と呼んだ人もいる。1
919年に国際連盟参加を
否決した共和黨員たちの系
譜に位置づけたのだ。
確かに、国連など国際機
アモが3月下旬から5回も
発生している。
しかし、ハマスが消えれ
ば抵抗主体はなくなり、ガ
ザ市民の集団追放やイスラ
エルによる再占領も容易に
なる。これこそ悲劇の本質
にかかわる逆説なのだ。家
族の死別が日常となっても
なお、トランプ氏のニヒリ
ズムを動かさそうにない。
やり場のない怒りと悲し
みを抱くガザ住民やウクラ
イナ国民にとって、中世ア
ラブの教養書『マカーマー
ト』(堀内勝訳注)の一節
は人ごととは思えまい。
「もし時の運 我に背向
けなば ああ願わくは 我
や我が子らを 辛き浮世よ
り 去らしめん 子らのみ
亡せて 我が身生残らわば
苦痛と呵責の念にさい
なまれ 身の置き所をいか
にせん」

英文は金曜日(10月)のジャパン・
ニュースに掲載予定です